



基調講演

“蒲生大好き！美しい環境、温かい和の心を次の世代へ”

かもろ女性の会会長 山下裕子氏



「かもう女性の会」の山下でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

ただ今の事例発表に大変感銘を受けまして、これからの私たちの活動の参考になるものと思っています。

1 はじめに

それでは、蒲生町の紹介をさせていただきます。

蒲生町は、人口 7,000 人程の自然豊かな町です。町内には前之郷川、後郷川という二つの河川があり、町外れで合流して別府川となり、錦江湾に流れ入っています。

また、蒲生八幡神社には、樹齢 1,500 年と言われる日本一の大楠がそびえており、町を見守ってくれています。その境内の隣に蒲生小学校があります。今年で創立 140 周年を迎えました。この小学校と私たち女性の会との交流は、現在でも続いております。



次に、かもう女性の会の沿革について紹介いたします。

明治 37 年、蒲生小学校同窓会女子部を中心とした活動が蒲生町婦人会の始まりです。記録によりますと、大正 2 年初代の婦人会長として、時の村長の赤塚源次郎氏の名前が記されています。初代の会長は男の方だったそうです。平成 8 年に蒲生町婦人会から「かもう女性の会」に名称を変更しました。同時に全国組織につながる蒲生生活学校と二枚看板を掲げて活動をしてきています。その頃、さらに「蒲生に文化的な活動を」との強い思いから、コーラスグループ「コーラス四季」結成し、現在も活動を続けています。今年で創立 20 周年を迎えて記念式典、記念コンサートを開催しました。それからご覧のとおり創立 114 年目と書いてありますが、これは婦人会時代から通して 114 年目ということです。



総会の資料が映し出されていますが、平成 6 年度は蒲生町婦人会総会、平成 8 年度は蒲生町女性の集いとなり、新たな再生の第一歩ということで「ひこばえ」の絵が書いてあります。そして平成 9 年度は「かもう女性の会」総会・各種女性団体の集いという表紙になっています。

長い歴史をつないできた蒲生町婦人会も

決して平坦な道のりを歩いてきたわけではありません。女性の社会進出、価値観の多様化、情報化が進む中で会員減少が起きました。記録にも残っていますが、当時の役員たちが熱い思いを込めて「婦人会という灯を消すことはできない。みんなで頑張りましょう」と会員に呼びかけたのです。現在会員数は95人程ですが、婦人会時代から一貫して奉仕活動や時代に即応した課題に取り組んでまいりました。

平成22年に始良町、加治木町、蒲生町の三町が合併し、始良市が誕生しました。市の人口は約76,000人、蒲生町は7,000人程でその一割にも満たない小さな町ですが、蒲生らしさを失わず、元気に活動を続けようという思いから、次のような活動方針を立てました。「健やかで心豊かな家庭、小さくてもダイヤのように光輝く町づくりを目指し、一人ひとりが知恵を出し合い活動の輪を広げながら、楽しく学習し、実践活動を推進する」というもので、それは今に引き継がれています。

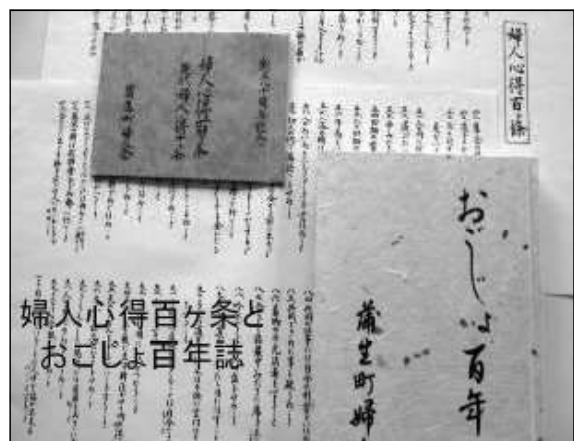
次に、かもう女性の会の運営についてでございます。

役員会が別に取りまして立案計画を立てていますが、このスライドは連絡員・代表者間の様子です。各集落の代表者（連絡員）に各種女性団体（JA女性部・生活研究グループ・老人会婦人部・EM研究グループ）の代表者が加わり、全体で35人が毎月一回定例会を開き、年間計画に沿って協議し実践活動をしています。会の初めは季節の歌をうたい、詩の朗読を聞いて始まります。

次に、記念誌の発行についてでございます。

婦人会の時代から節目ごとに記念行事を行い、記念誌を発行しています。

昭和57年に「おごじょ百年」を刊行していますが、この中には、明治37年から昭和57年までの婦人会の歴史や会員の随想、暮らしのアイデアなどが綴られており、活動の歴史を知る上で、貴重な資料となっています。「おごじょ百年」という表題にしたのは、「おごじょ」は若い娘さんのことですが、私達もいつまでも若々しい気持ちでという思いを込めて、また「百年」とは、この時点で80年と百年の歴史に達していなかったのですが、未来をも包括した百年という名称にしたとのことです。



これらの機関誌には、すべてに明治時代に作られた「婦人心得百ヶ条」というものが載っています。これは、ある集落の婦人会の引継箱の中から発見されたものです。明治年間、当時まだ十分に学校教育や社会教育を受ける機会を持たなかった女性の教育のために作ら

れたもののようです。家庭生活や社会生活をする上で心得なければならない事柄が、分かりやすく百ヶ條にまとめられています。その中からは、当時の風俗習慣や農作業、家事、子育てに励んでいた女性達の姿が生き生きと蘇って来るようです。現代の私たちにとっても戒めとなる項目が多数あります。

そこで、百十周年記念行事の一つとして「かもうおごじょカレンダー」を作りました。連絡員の投票で31ヶ條を選び、日めくりにしました。例を挙げますと、「人ごとを言はぬこと」、「あらい言葉つかいをせぬこと」、「腹を立てぬけいこをすること」、「子供の前では言葉をつつしむこと」などと分かりやすく書いています。そして「毎日先祖佛前に礼拝すること」と続き、毎日めくりながら戒めとしています。蒲生の観光交流センターでも販売していますが、観光に来られた県外の方の目にも止まり、購入してくださっています。お帰りになってから追加の注文もあり、遠くは北海道からもいただきました。

次に、機関誌「思うままに」を昭和40年から発行しています。B4版の手書です。今でも手書を引き継いでおり、今年の12月で400号となります。当時は毎月発行され、研修や啓蒙活動としての役割があったようです。現在は年4回の発行で、お知らせや活動報告、感想、暮らしの知恵などの記事を載せて会員に配布しています。一方、総会や研修旅行に参加するだけで、活動に参加している実感が無いという会員もあるのではとの思いから、今年から毎月「お知らせ鳥の掲示板」というA4のプリントを全会員に配布することにしました。その月の行事や研修会のお知らせ等を載せています。少しでも活動に参加してもらいたいと願っています。



次に、NHK「データナビ」の番組の取材についてでございます。

なぜ「かもう女性の会の取材か」と言いますと、鹿児島県の歴史の専門家の推薦だそうです。取材の目的は、女性の国会議員が出ていない県が全国で二つあり、その一つである鹿児島県を歴史的な面から県民性等を読み解こうということだったと思います。古い記録で言いますと「婦人心得百ヶ條」です。特に95條の「夫のきげんをとるけいこをすること」については、男尊女卑の風土という印象をうけます。「私たちの解釈は『夫が気持ちよく仕事ができるように気配りをする知恵と才覚を持つけいこをせよ』という意味にとらえています」とお話ししました。また、百條には「自分の思っていることは人中で話の出来るけいこをすること」とあり、しっかり自立した女性を目指す努力をすることを教えています。

この時の取材は、5月の第4土曜日に放映されました。

2 活動の信条

続きまして、活動の基本理念についてでございます。

- 「蒲生 だ一い好き」という熱い郷土愛。
- 「できる人が、できるときに、できることを」ということで、穏やかに和やかに思いやりを持って活動していこうとしています。
- 「一人の百歩より 百人の一步」目指して、和を大切にして支え合いながら進もうという思いです。

以上3点を基本に、日々の活動に取り組んでいます。

活動を通して

- ・ 地域貢献の喜びが生まれ。
- ・ 自分自身の生きがいとなり、心身の健康につながります。
- ・ 元気な高齢者であり続けるために活動を続けていきたいと思えます。

など、会員の励みになっています。ちなみに活動している最高齢者は90歳でございます。

次に、私達の活動の励みとなっている詩がありますので紹介します。

あとから来る者のために

坂村 貞民

あとから来る者のために
田畑を耕し
種を用意しておくのだ
山を
川を
海を
きれいにしておくのだ
ああ
あとから来る者のために
苦勞をし
我慢をし
みなそれぞれの力を傾けるのだ
あとからあとから続いてくる
あの可愛い者たちのために
みなそれぞれ自分にできる
何かをしてゆくのだ

この詩には、私たちが今ここに生きていることの意義が言い尽くされているのではないのでしょうか。

3 活動の実際

続きまして、私たちの活動についてでございます。

- (1) 環境浄化活動
- (2) 見守り活動
- (3) 伝統行事の継承
- (4) 行政との対話
- (5) 会員の資質向上を目指して

などを基本に取り組んでいますが、その他の活動として外部の研修会や大会へ参加しています。より広い視野を広げ、研讃を積む場となっています。

主なものとして

- ・ 市女性団体連絡会交流集会 女性のつどい
- ・ 市・地区生活学校運動交流集会
- ・ 県女性大会、県生活学校運動大会
- ・ 県コミュニティづくり推進協議会研修会
- ・ 始良市福祉祭り
- ・ 県下一周駅伝加治木中継所での接待
- ・ 湾奥水質調査研修

などのほか、このスライドには書いてございませんが、

- ・ 10月4日の赤い羽根共同募金活動
- ・ 赤十字奉仕団体研修会
- ・ 非常炊き出し訓練としての救急法の講習

などがあります。

それでは、(1)の環境浄化活動(EMを使って)についてでございます。

まず、①のEMを活用した浄化活動についてです。

EMとは、琉球大学の比嘉教授によって作られた「安全で有用な80種類以上の微生物だけを集めた多目的微生物群」と言われるものです。例えば、糖を発酵して精製する乳酸菌は悪玉菌を抑制し、光合成菌は有害物質を浄化し、酵母菌は有害物質を分解してくれます。EMの研究は日々進歩していますので、講師の先生による学習会を開き、新しい情報を学びます。

3年前に私どもの会ではインストラクターの講習会を受けました。平成6年旧蒲生町時代にEM活性液の製造器が役場に導入され、年5回蒲生支所の生活環境課が中心となって仕込みをし、会員や有志の方々と汲み出し、2リットルのボトルに詰めます。これは、町内のお店や役場で販売しています。

EM ボカシについては、米ぬかに EM 活性液を混ぜて密閉容器に入れて発酵させます。良い香りの真っ白なボカシを作っています。このスライドは皆さんで作っている様子です。この活性液は EM 団子作りにも利用しています。粘土にボカシを混ぜて EM 発酵液を加え、先程牧園町の方が発表されたとおり直径 5 センチメートルのボールを作り、乾燥させて川や海、池などに投入します。徐々に成分が溶け出して効果を発揮します。スライドでは男性の方が写っていますが、この時は衛生協会の方々と一緒に団子作りをしました。この団子を始良のラーメン屋さんの排水溝に投入したところ、悪臭もなく効果的だったとのお話を聞きました。それから、7月の海の日全国一斉投入や児童クラブによる河川投入も行いました。



この団子は、環境保全の団体の方々も用水路に投入され、その効果があったということで南日本新聞で紹介されました。私たちは大楠ちびっこ園の子ども達と一緒にその場でシジミを拾い、シジミ汁を食べました。この時に土団子が環境の浄化に役立つことを分かりやすくお話をしています。また、河川の浄化によって鮎や川ギス、川

二ナなどの水生生物も増え、あちこちの小川では蛭がたくさん見られるようになりました。鮎の季節になると多くの愛好家が町内外から訪れています。蒲生町のおソバ屋さんは、自分で捕った鮎で鮎だしのおソバを出して大変美味しいと評判です。

次に、②の出前講座についてです。

町内の三つの小学校で出前講座を行っています。環境学習を通して自分たちの町や自然に関心を持ってもらうことを目的としています。自分たちと同様に生き物にとっても住みやすい環境にしようと活動をしているのだということを確認してもらっています。浄化活動を楽しみにしながら、小さい子ども達に続けてもらいたいと願っています。2リットルのペットボトルに米のとき汁を入れ、それに EM の活性液、微生物の餌となる糖蜜を加えて発酵液を作ります。

学校の規模にもよりますが、これを 100～150 本用意します。同時に 500 ミリリッ